

## イデオロギーとは何か

—その構造と生態について—

この一文は、私の近著『時代に挑む社会科学』へのさ  
さやかな手引きである。今イデオロギーについて問うこ  
とは、時代の意義について問うことであり、現代社会科  
学者の生き方について問うことである。

### 一 ことばが乱れ飛ぶ

現代とはどんな時代であろうか。これを一言で言うの  
は大変難しい。曰く、グローバルな時代、宇宙の時代。  
曰く、国際化の時代、自由化の時代。曰く、ハイテクノ  
ロジーの時代、テクノ・バイオロジーの時代。曰く、技  
術革新の時代、産業化の時代。曰く、マスコミュニケー  
ションの時代、情報化の時代。革新の時代と見直しの時

## 高 島 善 哉

代。原点に帰れと危機意識の時代。活性化と不安の時代。  
マネーゲームとストレスの時代。軽小短薄とタレントの  
時代。等々、数えあげればきりが無い。世はまさに百花  
斉放の世と言いたい所だが、それとは裏腹の流言蜚語の  
世と言おうか、もしそれが言い過ぎだとするなら、放言  
飛語の世とも言うべきであろう。

だがことばは一人歩きするものではない。その背後に  
何かがあるはずである。その何かとは何か。最初にこと  
ばありき、とは社会科学者には考えにくい。何故なら、  
ことばは神と共にあるのではなく、人と共にある、と考  
えるのが社会科学の原点だからである。そしてその人間  
は社会の中で生き、動いている人間だと考える。さらに

その人間は歴史の中で生き、動いている人間だと考える。

もしことばが乱れ飛ぶとすれば、そしてもし現代が放言飛語の時代だとすれば、現代はまさに大荒れの時代であり、現代社会がまさに大揺れの時代であると見て誤りでないだろう。一方では限らない進歩が約束されているように見えながら、他方では今にも文明の危機が訪れそうにも見える時世である。同じことだが、一方では月と太陽が同時に顔を出すかと思えば、他方では月食と日食が同時に出現しそうな恐れが感じられる。プラスであればマイナスであれば、危機の意識を持たない現代人は皆無であると断言してもたいした間違いでなからう。社会科学者にとってイデオロギーというものが問い直されなければならぬ究極の理由がここにあるといえる。だがそれを今すぐこの場で論ずるには早すぎる。この拙論がすすむにつれて次第に明らかとなるであろう。

初めにことばありきではなく、初めに行為ありき(『ファウスト』より)、そして行為は人と共にありき、これが社会科学者としての私の信条である。人は行為し、行動する存在である。存在といっても、ただ単に抽象的一般的意味で言うのではない。人は、一方では自然的存

在であると同時に、他方では歴史的社会的な存在だと見なければならぬ。このような存在を私は人間の自然と呼んだわけであるが、それについて語るのも今はその場所ではない。ただここで予め言っておきたいことは、このような人間の自然的持ち主である生類が、これから論じようとするイデオロギー論の原点だということである。さらにもう一言。このような人間の行為や行動から、イデオロギーというものが誕生する。ここにイデオロギーの解明の鍵があるということだ。イデオロギーというのは歴史と社会の中で生まれ、人間の行為と行動によってつくり出されるものである。

## 二 産業とイデオロギー

では、イデオロギーというものはそもそもどんなものであろうか。まず社会科学の立場からイデオロギーの構造というものを調べてみることにしよう。社会科学では、この問題に接近するためにどんな視角が、そしてどんな手順が用意されているであろうか。

この問いに答えるために、私はまず産業ということばを取りあげる。それを手掛かりとしてイデオロギーとい

うことばに挑戦してみようというのである。産業とイデオロギーという組み合わせは一見していかにも奇妙な組み合わせであるようだが、しかし必ずしもそうとは限らない。産業化ということばが今の世に乱舞していることは前述の通りだし、イデオロギーの時代は去ったとか、いや去らないとか、そのような論議が囂しい昨今である。その一方で、産業もイデオロギーもその内容が極めて不確定で、人によってその使い方、語義がまちまちであるという点で、二つのことばにはまさに現代的な共通性があると言ってよいのである。そこでまず産業という語について考えてみることにしたい。

産業という語が今どんなふうに使われているかということについては改めて言うまでもなからう。農業も工業も商業も産業であり、運輸業も金融業もサービス業も産業である。これらはすべて本来経済の世界の営みであるから、産業という名のつく世界だと見ても必ずしも不当ではなからう。だが現代では、産業の枠は際限なく広がっていつて止まる所がない。スポーツ産業もあれば風俗産業もあり、情報産業もあれば受験産業もある。医療産業もあればレジャー産業もある。今の世の中で産業の対

象とならないものは皆無に近いであろう。いわゆる物質的な財貨の世界だけでなく、宗教や芸術やその他の文化の世界にまで産業化の手は伸びていく。これが現代の活性化といわれるものの実相であろう。これがまさしく放言飛語の実例である。

これらの放言飛語を整理し体系づける所から社会科学の第一歩がはじまる。例えば、これらの産業もしくは擬似産業を仮りに第一次産業（農漁業など）、第二次産業（重工業及び軽工業など）、第三次産業（商業、金融業、サービス業など）とまとめることができる。これは経済学の常識である。さらにそれを踏まえて、第四次産業、第五次産業などと分類することもあながち不可能ではあるまい。ただ問題はこれらの第三次、第四次等々の産業がどこまで産業の名に値するかということであろう。もし産業 (industry) という語を business という語に置き換えてみるならば、ここにあげた産業はことごとくビジネスの世界に属するものだから産業の名に背かないと言えるであろうが、それはインダストリーという語の本来の意味（勤労）からかけ離れたものとなるであろう。例えば leisure（余暇）と business（忙し）と

が同義語になる（いわゆる余暇の時代は多忙な時代）。これは産業概念の墮落であり、現代文明の矛盾に満ちた退廃である。

第一次、第二次、第三次産業などと言う代りに、産業構造という語を用いるとすれば、それは産業という語のアナキズムを体系化するためにさらにもう一步前進したことになる。この場合産業構造という語は前記の諸々の産業を全体としてまとめてみるのに役立つであろう。さらに、産業全体ではなく個々の産業についてもこの語を有効に使うことができる（例えば製鉄産業の構造、自動車産業の構造等々）。日本とアメリカの産業構造の比較とか、円高による特定産業の構造的好況ないしは不況等々などといわれる場合には、この構造概念が有効に作用しているのである。

けれども構造という語はまだ厳密な意味で学問上の用語すなわち概念とはなっていない。なぜかというところの語には、構造を構造として支える支柱、心樑、難しく言えば構造原理というものが示されていないからである。多様なものごまきである構造が、学問上の概念として役に立つためには、その構造をまとめている中心の支

柱がなくてはならない。支柱のない建物は脆弱である。統一原理のないごまきごまきは、体系ということではできない。この統一原理、支柱、心樑を確定する必要があるのだから、そこからはじめて学問的な作業が始まるのである。

かつて経済学者たちはこの作業を最も基礎的で典型的な産業から始めた。産業の名に最もふさわしい産業である工業から始めた。それは第一次産業である農業ではなくして、第二次産業である工業であった。それは工業が現代産業にとって最も産業の名に値する産業であり、最も典型的な産業であったからである。かつて産業革命と言われたときの産業がそれであった。今日の目を瞞るような技術革新の時代に、第二の産業革命が進行しつつあると言われている一方、それは第一次産業革命が基礎的な産業で起った革命であったのに対し、第二次産業革命が高次の、つまり技術革新による先端的産業で起ったのだという理由で、第二次産業革命説に反対する専門家も少なくないようだ。それはいずれともあれ、産業構造の確定のためには本来の意味における産業、言い換えると、産業のいわば原点から分析を始めるということではな

ばならない。経済学の本来の仕事がここから始まるというところをここでの結論として言っておきたい。そしてこれはただ単に経済学の原点であるばかりでなく、後で、結論の所で述べるようにもっと広く社会科学の原点でもあることを注意しておきたい。

以上産業を見る眼（視角）と産業の概念に接近する方法（手続き）について簡単に述べたことは、そっくりそのままイデオロギーの概念についてもあてはまる。今イデオロギーという語はどのような意味で流布しているのだろうか。イデオロギーというものの構造はどうだろうか。イデオロギーの分析はどこから、どのように始めたらいのであろうか。「産業」に較べて「イデオロギー」はその内容がはるかに複雑で掴みにくい。産業の社会科学という表現には親近感があるう。だがもし、イデオロギーの社会科学という表現をあえてするとすれば、必ず多くの人びとの抵抗感に遭遇するに違いない。確かにイデオロギー論は細分化した現代の社会科学には馴染みが少ない。極めて困難な問題領域に属する。だがそれは、現代の社会科学そのものが根底から問われている証拠ではなからうか。

### 三 魔術からの解放

イデオロギーという語には何とも不可思議な魔術性が付着している。一種異様の魅力があるともいえる。社会科学で使われている用語のうち、この点でイデオロギーという語に太刀打ちできるような語は、例えばフェティシズムやカリスマといった語は別として、その数が少ないかも知れない。産業という語など全く問題にならないのである。イデオロギーという語は、一般人にとって類い稀なき魔術語として現れている。社会科学者にとっても例外ではない。一体、イデオロギーとは何であらうか。

例えば、イデオロギーという語は党派的な立場を表す語だともされている。例えば、イデオロギーという語は偏見と独断を表す語だともされている。例えば、イデオロギーという語は虚偽と作為を表す語だともされている。このようなものとしてイデオロギーという語は、現代では敵手を倒すための最も手近で有効な殺し文句とさえなっているのである。アラビアンナイトに現れる「オーブン・セサメ」、これを現代的に表現したものが、「それはイデオロギーだ」である。「あの男は赤だ」という殺し

文句はその最も代表的な一例であろう。

では、イデオロギーという語は本来そのようなものであったであろうかという点、決してそうではないのである。試みに辞書をひいてみよう。イデオロギーという語にはまっ先に観念とか観念学という訳語がついている。成る程、イデオロギーは何よりもまず観念のことであり、次に観念学（観念論ではない）のことだったのである。そこでこの点についても少し語用論的な考察をすすめてみることにしよう。

もしイデオロギーが観念だとすれば、人びとがそれぞれ持っている思想や考え方や意見などいづれもイデオロギーである。もしイデオロギーが観念だとすれば、人びとがそれぞれ持っている信条や学説や主義主張などもすべてイデオロギーである。そのほか、観念として現れるものはことごとくイデオロギーである、ということになる。少なくともイデオロギーとなることができるものだといふべきであろう。

しかし、これではイデオロギーについて何かとままた観念が得られたというわけにはいかない。イデオロギーは観念であるとしても、すべての観念がイデオロギー

であるわけではない。ここで言う所の観念がイデオロギーとなるためには、何かの条件なり規定なりがなくてはなるまい。つまりイデオロギーとしての観念について問わなければならない。その点をさらにすすんで考察しなければならぬのである。

まず第一に、イデオロギーとしての観念はそれぞれの個人の心中に生まれ、それぞれの個人によって育てられるものであるとしても、ただ単に個人的なものではなく、多数の個人に共通したもの、換言すれば、社会的、集団的な性格のものであると言わなければならない。この点はずべて人間の思想や行動についてそう言えることではある。しかし、イデオロギーについてはその社会性、特にその集団性について銘記しなければならない。人間は単に社会に住む生類（社会的動物）であるだけでなく、多種多様な集団に別れて住む生類（集団的動物）であると言わなくてはならない。個人にはそれぞれの顔があるとしても、これらの個人は同時に同じ集団の顔をも備えている。そして今日のように社会が複雑になればなるほど、一人の個人がいくつかの顔を同時に持ち合わせていることになる。このように見えてくると、イデオロギーと

いうものの集団性が、その観念性を克服するための最も身近で掴みやすい手掛りであることがわかるであろう。

そこで問題は、これらの個人々が持っている顔、すなわちその集団的な顔とは何かということである。それは言うまでもなく、それらの個人々が実際に生活し、考え、行動している社会的な場の顔であるにはかならない。それは、その人の職業や地位や身分などによってさまざまであろう。さらに地域や国土などの違いによってもさまざまであろう。そしてこれらの違いが、同一の個人においていろいろな形で重なり合い、交わり合っている。個人々の顔に共通性と特殊性という二つの性格が、複雑で容易には捕捉しがたい影を落としていることを見落としてはなるまい。イデオロギーとしての観念の複雑さは、産業の観念に比較してみてもいかに捕捉しにくいものであるか、これだけの簡単な説明でもたやすく理解できるであろう。

そこで、イデオロギーとしての観念をさらに突っ込んで検討するためには、その下支えとなっている社会的集団の分析に入らなければならないことになる。その結果として、例えば企業者のイデオロギーとか、労働者のイ

デオロギーとか、農民のイデオロギーとか、商工業者のイデオロギーとか、公務員や教師のイデオロギーとか、その他種々さまざまのイデオロギーについて語ることができるし、また現にそのような語で語られているのである。しかしそこへ行く前に、先に掲げた第二の意味でのイデオロギー、即ち観念の学としてのイデオロギーについてみておかなければならない。

観念の学としてのイデオロギーとは何であろうか。ごく一般的には、観念の発生、観念の本質、観念の形態といった難しい哲学的な諸問題が考えられるであろう\*。けれどもここではそこまで立ち入って論ずることはできない。社会科学の立場からみて、イデオロギーとしての観念がどのようにして生まれてくるかという所へ焦点を絞らなければならない。といっても問題の性質上、哲学的な論議をまったく避けて通るわけにはいかないのであって、この点にイデオロギー論の難しさがあるものと言えよう。

\* 例えば十八世紀のイギリスやフランスの哲学者の著作のなかにみられる。ハチスンやトラシーなどがそうであろう。では、イデオロギーとしての観念はどこから生まれる

のであろうか。それは人びとの生活の中から、人びとの実践の中から生まれる。人びとの感情や欲求や願望や意志などから生まれる。もしこれらのものを一括して、生活関心、簡単に関心 *interest* と呼ぶならば、イデオロギーというものは現に生きている人間の関心から生まれると言うことができるであろう。以下この点についても少し立ち入った説明を加えることにしよう。

人間はもともと自然の子であり、自然の中に住んでいる。だから、自然に対する関心が、人間にとってまず第一義的なものであることは否定できない。しかし人間は社会の中にも住んでいる。だから、社会的関心が自然的関心と同様に、人間の本性にとって本質的なものであることも改めて言うまでもないのである。これらのことは、イデオロギーというものが人間の本性と切っても切れない深い関係にあることを示唆しているように思われるのである。ではどのようにしてであろうか。この問いに答えるために、まずここで言う所の関心について知っておく必要がある。

関心 *interest* という語は、ラテン語の *interesse* からきている。(ドイツ語やイタリア語ではそのまま *Inter-*

*esse* となっている。) *interesse* は *inter esse* 即ち間に在るということである。何と何の間に何が在るのであるか。それが問題なのである。哲学的に言えば、主観と客観、もしくは主体と客体の間に在るものであろう。宗教的に言えば、神と人間との間に在るものであろう。科学的に言えば、自然と人間との間、それを含めたものとして、人間と人間との間に在るものであろう。これをもう少し具体的に言うならば、経済や政治や教育などの場で展開される人間の営み、即ち人びとの実践と社会との間に在るものであろう。*interesse* とはこのようなものである。それは関心とも訳されるが、興味とも訳されるし、また利害とも訳される。こういう意味で関心とは、人間存在の基本に関するものなのである。人が何かに関心を持つということは、人が自然なり社会なりに対して能動的な立場に立つということである。それは、人が現に自然と社会の中で生きているということなのである。生きていることを自覚することなのである。これに対して、何物にも関心を持たない(無関心)ということとは、自然と社会の中に生きていながら実は生きていないということである。人間と自然もしくは社会との間に在るも

の、その両者を結びつけるもの、それが取りも直さず、語の本来の意味における *interesse* なのである。

以上のことは、観念の学としてのイデオロギーを解明するためには、どうしても人間論から出発しなければならぬということを示唆している。人間論といえ、社会科学の枠を越えている。それは社会科学が哲学、宗教、芸術などの諸領域に接続する問題領域である。社会科学のいわば限界領域に属する問題だが、そのことを意識しながら、さらにも少し *interesse* の意味と役割について考えてみなければならない。

*interesse* とは、実践する人間が対象に向かって働きかけるときのその態度を指すものと解されよう。*interesse* は、行為する主体と行為の客体とを関連させる。といてそれは、客体の側から出てくるもの(例えば印象)ではなく、主体の側から出てくるものと考えなくてはならぬ。勿論、客体の側からの反応も重要であり、これを無視することはできないけれども、始発は主体の側にあると見なければならぬ。これをごくわかりやすい日本語で表現するならば、構え、ということばが最もふさわしいように思われる。構えとは、これから何かを打ち

出そうとする人間の姿勢である。これから写真を撮ろうとするカメラマンの姿勢、これが構えである。それはカメラマンの何かに対する関心から生まれる。関心がなくとも、その何かは存在するであろうけれども、カメラマンにとってはまだ現実には存在しないのである。撮影の時と場所、方向や角度などがまず決ってからはじめて写真は現実のものとなるのである。これがカメラマンの構えである。

構えがもう一步相手方(客体)に近づくと、それが立場となる。立場は構えと客体とが連接されることによって生まれる。だから立場は構えよりもより現実的なものと考えてよからう。そこから、イデオロギーとしてのイデオロギーが生まれる。

#### 四 イデオロギーの成立

立場には、私的なものと公的なものがある。また立場には、個人的なもの和社会的なものがある。ここで取りあげるのは、言うまでもなく公的で社会的な立場である。そしてこれが、イデオロギーとしてのイデオロギーの基盤であることをまず言うておかなければならない。

では、立場はどのようにして出来るのであろうか。それはさまざまな社会的集団に属する人びとの利害関心から、従ってさまざまな集団の構えから生まれる。それぞれの集団の利害関心——構え——立場を表出したものがイデオロギーである。それは単に集団の内部だけで通用するものではなく、集団の外に向かつても通用するものでなければならぬ。そのためには、その立場は単なる自己主張としてではなく、客観的なものとして合理的で説得的なものとして表出されなければならない。そこから立場は思想として、理論として、あるいは定式として、つまり特定の整形を持った観念として打ち出されることになる。これが取りも直さずイデオロギーとしてのイデオロギーである。イデオロギーが時に観念形態と訳されることがあるのはこうしたことを指すのであろう。

多少ベダンチックになるけれども、語用論的に言つてもし観念としてのイデオロギーを語の第一の意味におけるイデオロギーと名づけ、観念の学としてのイデオロギーを語の第二の意味におけるイデオロギーと呼ぶならば(前述)、ここで言うところの観念形態としてのイデオロギーを第三の意味におけるイデオロギーと名づけること

ができるかと思う。そしてこれがまさに本来の意味におけるイデオロギーなのである。そしてこれに定型を与えることができる知識人がことばの本来の意味における Ideolog なのである。

こう見てくると、イデオロギーというものは千差万別でありうるし、また現にそのようなものとして現れている。極端に言えば、人びとの間に立場の違いがある限り、イデオロギーは無数であり、帰するところを知らないものであるかのように見える。ここからして、イデオロギーに対する不信の念が高まり、イデオロギーと言えば直ちにそれが虚偽の意識であるとか、魔性のことばであるとか、そういった疑惑と不信が胚胎することになる。価値観の自由が叫ばれる現代においてはまことにもつともなことであろう。

だが、ここがイデオロギーにとつての正念場である。立場は私的なものではなくて公的なものであり、個人的なものではなくて社会的なものだと先に言った。成る程、社会的、公的な立場といつても、それは単一無二なものではなく、いちいち枚挙にいとまがない。しかし、どの立場がより多く公的で、どの立場がより広く社会的であ

るかということを知ることが決して不可能ではない。不可能でないばかりでなく、そういうことを心がけるのが社会科学の仕事なのである。ちょうど、第一次産業、第二次産業が産業の基本であるように、社会にとって最も基本的なイデオロギーと、それほど基本的でなく派生的なイデオロギーとを区別し、さらにその中間に種々さまざまなイデオロギーが併存していることを知ることはそれほど難事ではない。経済学や政治学や社会学などその他諸々の社会科学はこのような仕事に貢献している。要するに、社会集団の質と量との分析によって、それぞれの立場の質的な差異と量的な広がりを確認することは不可能ではないのである。すべての立場を同じ平面で噛み合わせるのには、およそ産業という名のつく産業を同じ次元で取りあげると同様に、正しい社会科学のなやり方ではないのである。

現代の社会にあって、立場と立場の違いを最もラディカルな形で打ち出しているものは何か、それがまず問われなければならない問題なのである。それは(社会)体制と(社会)階級と民族に関する人びとの関心<sup>\*</sup>と立場の相違であろう。

<sup>\*</sup> 体制への関心、階級への関心、民族への関心については私の『社会科学入門』を参照してほしい。

(社会)体制に関する関心は、自由主義か全体主義かそれとも社会主義—共産主義かといった見方の相違、従ってイデオロギーの違いということに繋がる。(社会)階級に関する関心は、資本の立場か地主の立場か労働者の立場かというイデオロギーの違いに繋がる。そして民族に関する関心は、民族の統一と独立、支配と隸属からの解放というイデオロギーに繋がる。以上の三つの立場が、現代のイデオロギーを集約し凝集する最も基本的な立場ということができよう。(それに次いで国家や家族が重要である。)これらの三つの基本的な立場のほかに、いろいろな下位の立場が競い合っていることについては繰返して言う必要はなからう。

このことから、イデオロギーとしてのイデオロギーとはどのようなものでなければならぬかということが知られる。まず第一にイデオロギーは、社会集団の認識と結びついたものでなくてはならない。認識といっても単に個々の集団の認識でなく、全体としての社会の認識でなくてはならない。つまり観念形態としてのイデオロギ

それは、社会科学的な認識によって裏づけられ、合理化されたものとならなければ、イデオロギーとしての価値がないということになる。イデオロギーと社会科学との切っても切れない関係がこれによって理解されるのである。

例えば農民のイデオロギーとかサラリーマンのイデオロギーとか官僚のイデオロギーとかさういったことなども考えられるし、存在するけれども、それらはまだ、ここで言うイデオロギーとしてのイデオロギーの資格を十全な形で持たせてはいない。それはいわば、部分的なイデオロギーに過ぎない。

第二に、イデオロギーとしてのイデオロギーの地盤は人びとの最も身近な生活の場である、ということに注意したい。それは政治と経済の世界である。言い換えると、人びとの最も現実的な生活関心、即ち利害関心が渦巻く場が政治と経済だからである。政治と経済はイデオロギーの生まれ故郷であり、イデオロギーの檜舞台だということができる。成る程、宗教の世界も政治と経済の世界に劣らずイデオロギーのふる里であるように見えるかもしれない。しかし、宗教は政治や経済と結びつくことによってはじめて、そのイデオロギー的性格が現世的な

ものとなるのであって、修道院の中のイデオロギーは詮社会科学の対象とはならないのである。信仰上の対立は利害と結びついてはじめて現世的な対立となる。

第三に、イデオロギーとしてのイデオロギーは、その本性上対立的であり、二者闘争的なものだと言わなくてはならない。なぜなら、社会に集団と集団との対立や亀裂があるということがそもそもイデオロギー発生の客体的根拠なのだからである。イデオロギーの原点は利害関心の違いということであった。そうだとすれば、利害関心の違いがあるかぎり、イデオロギーとイデオロギーとの間の闘いは容易に収束しないであろうと見るのが妥当な認識である。イデオロギーは生まれながらにして闘争児なのである。この闘争は、天上の神々の間の闘争よりも地上の神々の間の闘争においてもっと熾烈なものであることは明らかだ。イデオロギーとイデオロギーとの闘いは、天国的な争いではなく、地上的な争いだといっても失当ではなからう。平和の神に仕えるイデオロギーにしても、地上の神々と無縁でないばかりか、地上の神々と結びついてはじめて現実的なものになるものだとこのことを忘れてはならない。

以上の三点を総括してみるとこういふことになる。イデオロギーは社会における人間の生き方と切っても切れない間柄にある。イデオロギーは社会認識即ち社会科学の土俵の外にあるのではなく、社会科学の土俵の中にある問題だと言わなくてはならない。にもかかわらず、現在ではイデオロギーは社会科学の圏外に追放されているかのである。イデオロギーの社会科学といったような表現は一見不可解な表現であるようにも見える。イデオロギーというものはその本性上闘争的なものだとすれば、それは所詮価値観の相違からくるものであって、この闘争に最後の審判を下すことのできる最高の法廷はどこにも存在しない、ということにならないであらうか。このような疑問が起こるに相違ない。イデオロギーとしてのイデオロギーは社会科学の裏付けがなくてはならないと述べたが、それはイデオロギーの本性から見て不可能な要請ではあるまいか。このような疑問も起こるであらう。言い換えると、イデオロギーというものは、客観的な真理と馴染み得ないものではなからうか。科学のことばとイデオロギーのことばはその本性上互いに矛盾するものではなからうか。このような疑問が起こらざるを得ないであらう。

これは、さきにイデオロギーの語義としてあげた虚偽意識としてのイデオロギーという論点にかかわっている。確かにイデオロギーに対する不信がここから胚胎する。イデオロギーはどこまで真実でどこまで虚偽であらうか。これがイデオロギー論にとって最後の、最も重要で理解に困難な問題点なのである。

##### 五 虚偽か真実か

そこで話を振り出しに戻して考えてみることにしよう。イデオロギーというものはじめから善玉と悪玉に分け、善でなければ悪、悪でなければ善というように、二者択一的な考え方が間違っている。イデオロギーは「オーブ・ン・セサメ」というような魔法のことばではない。「シヤット・セサメ」でもない。それはもともと、ものごとの正しい認識から始まった。観念の学として生まれたものであり、従ってそれは、哲学や科学と切っても切れない間柄にあったのである。この点を社会科学の立場からもう一度反省してみる必要がある。

社会科学は経験科学である。では経験科学とは何か。

その前に経験とは何か、ということにならざるを得ない。ここでは哲学的な論議を行なう場所ではないが、人びとの経験が、人びとのものごとに対する関心 $\parallel$ 利害関心から生まれてくるものだということをまず強調しておかなければならない。経験の端緒は外界からの *impression* (印象) にあるとされるのが一般であるけれども、しかし前にも言ったように、印象を受け容れる人間の側にまずものごとに対する関心と構えがなければならぬはずである。これは先に述べたカメラマンの例によっても納得できよう。自然にせよ社会にせよ、それは人間にとって客体であり主体ではない。主体はあくまでも人間であるはずだ。人間の主体的な働きかけがあつてはじめて、自然や社会の扉が開かれ、その秘密が啓示されることになる。「叩けよ、しからば開かれん」である。その意味で「はじめに行爲ありき」なのである。ヒュームなどによつて代表されるイギリス経験論ではそこまで突っこんで論じていないが、このような観点から経験論を見直すことも決して不可能ではあるまいと思われる。

この点でドイツの社会哲学者ハーバーマスの諸著作が非常に示唆的である。特にかれが「認識と関心」という

問題を打ち出したことに注目したい。認識と関心の問題は、理論と実践の問題に繋がる。ハーバーマスはその後の著作『コミュニケーション的行動の理論』でこの問題をさらに追究している。そこではイデオロギーの問題が扱われているわけではないけれども、私の問題意識にとつても教えられる所が少なくない。

イデオロギー論の立場からみると、認識と関心の問題は、そもそも認識というものはどこまで認識主体の利害関心と結びつくかということになるであろう。結びつくといつても、たまたま偶然に、あるいはある特殊な事情のもとで結びつくということではなく、認識と利害関心がどこまで、そしてどのようにして内在的に結びつくかということではなければならない。イデオロギー論が社会科学の土俵の論議を必要とするのはこのような理由によるのである。

抽象的な論議はこれくらいにして、もう少し具体的に社会科学の古典のなかから、認識と関心、理論と実践の統一という意味で最も典型的な巨人を取りあげてみるがいい。アダム・スミスとカール・マルクスとマックス・ヴェーバーの名をあげるのに躊躇する人は少ないであらう

う。『国富論』と『資本論』と『経済と社会』が念頭に浮かんでくる。これらの三大著作には強い共通の姿勢と、それぞれ際立った個性とが刻印されている。

まず共通の姿勢とは、時代に働きかけ、時代に挑戦しようとする社会科学者の姿勢である。時代と社会、人間と文明への鋭い洞察と関心、この三人の社会学者はそれを共有したのである。かれらはその関心を、体制と階級と民族という社会科学の視座と結びつけることに努力した。そういう意味で、かれらは社会科学史の三大巨峰となったのである。

次に際立った個性というのは何であろうか。それは、スミスもマルクスもヴェーバーも共に体制と階級と民族の柱を持ちながらも、その三つの柱で堅固な建物を組み立てようとする仕方に大きな違いがあるということである。それは時代的な関心を社会科学の理論にまで高めようとする方法の違いなのである。

簡単に言うと、スミスにあっては経験的自然法といわれる方法、マルクスにあっては弁証法的唯物論といわれる方法、ヴェーバーにあっては理解的社会学の方法である。これらの三つの方法の違いについては今論ずる場所

ではない。今肝要なことは、スミスとマルクスとヴェーバーの方法の違いがどこから生じてきたかということなのである。それもまたここでは詳論することができないから結論だけを記しておくことである。かれら三人の方法の違いは、研究の対象である歴史と社会に対する研究態度の違い、つまり構えの違いから生じているものと見なければならぬ。このような研究態度の違いを、私は方法態度の違いということばで表現したいと思う。方法 *method* とはギリシア語の *meta-hodós* からきた語で、道に沿って歩くというほどの意味である。どの道に沿って歩くのが最も正しく真実に到達することができるかということ論ずるのが方法論の仕事なのである。だが注意せよ。方法ははじめから与えられているものではなく、はじめは誰かによって切り拓かれたものである。それが、後の人に伝えられ、補修され、改変されて今に到ったものであろう。

以上の二点をまとめてみると、関心と方法態度との間には深い内的な関係があることがわかる。方法態度は認識の違いの態度を意味する。そうだとすれば、このことからスミスとマルクスとヴェーバーの科学的労作のイデ

オロギー的性格を解明する糸口が発見できるというものはなからうか。即ち、スマスは市民的産業社会のイデオログであり、マルクスは産業革命成熟期における工場労働者階級のイデオログであり、ヴェーバーはさらに高度に発展した産業社会即ち独占資本主義社会における中間階級（インテリゲンチャー層）のイデオログである。

もしこのように見ることができるとすれば、イデオロギーは社会科学者にとって無用なものであるとか、有害なものであるとか、はじめから決めてかかるわけにはいかないことがわかる。反対に、スマスもマルクスもヴェーバーも何らかの意味においてイデオロギーを持っているたからこそ、時代に挑むことができたということになる。イデオロギーはこれらの巨人にとって理論的仕事のバネであり、知的実践の原動力であったと見なければならぬまい。『国富論』や『資本論』や『経済と社会』が活力に溢れ、現在なお社会科学者の関心の的となっている一つの理由がここにあるのである。

このように言ったとき、直ちに起こり得べき疑問はこうである。では社会科学にとって唯一で客観的な真理と

いうものはあり得ないということになるであろうかと。いかにもその通りである、と答えなければならぬまい。スマスにはスマスの真実があり、マルクスにはマルクスの、ヴェーバーにはヴェーバーの真実があると答えるのが正しい答えであろう。それでは、社会科学の理論というものは、すべて相対的な妥当性しか持たなくなるほかはなく、社会科学への不信の念は高まるばかりではあるまいか。このような疑問が続いて起こらざるを得ないであろう。この疑問に対しても、ある意味ではその通りだ、と私は答えたい。

これは明らかに前後撞着であり、紛れもない自己矛盾であるように見える。しかしながら、ここにこそ、イデオロギーというものの魔法的性格が顕にされていると言うことができよう。社会に対立と分裂がある限り、イデオロギーは不可避であると先に述べた。そして、認識と関心が内面的な血縁によって繋がっているものとすれば、認識者の構えと方法に、対立と分裂が起こり得るのである。うことは理の当然であると言わなくてはなるまい。とはいえ、すべて社会科学者には、社会科学者として守らなければならぬ共通の約束があるはずだ。それは、歴史

と社会の中に生きている人間の眞実性を、どのようにして、どこまで、わがものとすることができるか、ということなのである。社会的人間の眞実を、誰が、どこまで、如実に把握することに成功したのか、これが究極の論点であり論争点なのである。社会科学の眞理というものは、一方から見れば相対的であると同時に、他方から見れば絶対的でもある。

イデオロギーは生きている。社会科学の眞理も生きものである。何故なら、その背後にはいつも生きた人間がいるからである。イデオロギーが教える眞理はこれなのである。この眞理を無視して、イデオロギーをただ単にイデオロギーとして扱ったり、理論をただ単に理論として扱ったりすることがあるとすれば、それは、イデオロギーを退廃させるとともに理論を虚無化することに終らざるを得ない。その結果として生まれるものが虚偽意識としてのイデオロギーであり、人間不在の専門化であろう。それは、いわゆる保守であれ進歩であれ、いわゆる右であれ左であれ、いわゆる黒であれ赤であれ、いわゆる白であれ灰色であれ、いずれであるかを問わないのである。

以上を要約して次のように言うことができるであろう。社会学者はイデオロギーから逃亡したり、イデオロギーを無視したりすることはできない。他方において社会学者は、イデオロギーに安住したり、イデオロギーに拘泥したりしてもいけない。スミスやマルクスやヴェーバーをまつまでもなく、現代の社会学者は、欲すると欲しないにかかわらず、このような二律背反の前に立たされていると言えないであろうか。

## 六 私 の 提 案

最後に一言。現代の社会学者は、イデオログとしてのスミスとマルクスとヴェーバーから何を学ぶことができるであろうか。この巨人から学びとらなければならぬことはほとんど無尽蔵といってもよからう。これらの古典に内在し、その隅々にまで探究の鋏を入れるのももちろん必要であり有意義である。けれどもイデオロギーは時代と共に転変する。しかも、優れたイデオロギーは、ある意味で時代を超えた何かを持っている。では何を、これらの巨人から学びとり、また学びとってはいけないのか。この問いに対する私の解答を、もし記すこと

が許されるとすれば、それは、産業化とは何か、と改めて問い直すことだと言いたい。何故なら、産業はことばの本来の意味においてインダストリーであり、労働だからである。産業はいかなる体制でもその体制を支える基盤である。産業は人間と自然を結びつけるばかりでなく、人間と社会をも結びつける。産業はその意味で文明の母であり、社会進歩の父である、ということもできよう。

産業は、人間の主体的な活動であることによって、社

会的生産力の担い手となり、民族的エネルギーの原動力となり、人類平和の基礎を形成するものだと言ってよい。スミスとマルクスとヴェーバーと、そのいずれがこのよきな産業観により多く貢献したであろうか。これが現代のイデオログにとっての設問ではなからうか。かくて問題は再び振り出しに戻るのである。

(一橋大学名誉教授)